山女

21

723
.M1

6940

△し女十六、廿ノ花云以歌、并詞為卷名源氏世二ノ三月ヨリ世四ノ十月迄イ此卷ニ見タリトゝ
細流ニハ世二ノ四月ヨリ世四ノ秋ノ末迄トゝ、両伝共ニ有其故花ニハ年代リ宮ハテトゝ
薄雲ノ三月ニカヽレ侍ラ三月ヨリトゝ△細ニハ年代リ宮ハテ五ノ五月ヨリトキリ
何ニテモ国五ノ三月ノ末ノヨリ可成卷ノ名ハ此卷ニ五節ノ舞姫ノイヲキ故付タル所可心得ヽ
年カハリテハ薄雲ノ去年三月ニカヽレ侍周剛ニアメリテヽ剛ハ果ノ字ノ心カ世中色改リテ下ノ衣ヲノヅク
可成時ニ又衣更ノ折カラヽ　祭トイヒカモノヽ四月中ノ酉ノ日ヽニシテニカヲ入テ可見　大カタノ空ノ気色四月
清和心ヽ　カツラノ下風　賀茂ニ桂ト葵トツガヒタル草木ヽ多ニテハ桃園ノ庭カツラノ下風ヲミテ人ヽカモニ居給
トキノヽヲ思ヒテヽ　ウツギノ日ハケイノ祭ヨリ三日前四月ノ中ノ午ノ日ヽ可日源ヨリ次ヘハ文ヽ今日ハトアルハ
祭ノ日ヽミソギノ日ハ文ヲ出ス祭ノ日ハ手ヲヽ出ヽ
カケキヽハ源ノ手　去年迄カモニテ祭ノ日ケイシニ行ニ今年ハ除服ノ禊ニ立カヘリテ友衣ノ禊ヲシタニハ下ハ思カケキヤ
トヽ友ノヤウシ　此卷ニハ測ニモタセタル事多　紫紙ニ書ニハ藤ニ付ル余情アリ藤花ハ友衣ニヨソヘテヽスノヨカハ
好色メカヌヽ
手十四首

△年ノワヽて高ハ立そもゆきハ世中をあらし除服
たまわてうもゝへのかゝどをゝしけめ
まてゝまつわれらはいかはるる乃うらはさ
ん地よけなふりお行院ハつまくゝやうなのめ
おまへあるうつゝのそゝ風をうしきまはきても
わのきくゝいかりひ出るうゝともあふふ大友ハ
みちゝ乃日もいつのりのどうふあはさふらんやう
とふゝひやそ也所へ里ふい
係
うけきやいか川瀬乃波も立かへり恋りみう義の
ふぢはやつまをむゝさ見のかんたそふゝすぐよう
よて藤乃花りはをあまへ是行のはあれなまハ

潢粧斎

若ヤウレ昨日今日ト思シニハ月日ヱリトし性タイモ除服ノトキスタリ
セニハ仰ルハ古今アスカ川ノ事し
アスカ川フチニモアラヌ我宿ヲセニヤハ
リ行モニリ有ケル
けテハ宿ヲウリタル
トキノコトヲしセニシ
銭ジモシセクルし
服ノ服衣ヤへ装束ヲ除タヒモ丸タルトし

はりへしありぬ、
あちきなしは昨日と思ふまゝにはみなかみの
せりよけるせを隔たくとてつわあはせまつの
はめとあめそてえおはしはぶく猶しの雅なともも
きんしのりとり所まろきまでかりしやまつこと
せわはを院はみなるしきうよわもかりの竹へど、
おもしやうよくしきはめは御心ことなどのあるが
こうとくもかしうくはめとしはとおかやきさはれ
おわくの清かふらひなどは奉こえなりしそて
いとまあ庭すなれはきさこえもまゐらりはべ
おうむかうもてまはく小庭し女四宮の清方にも

立え弐ヤロノ人ヲ女五ノ
宮後ア此二條へナビキ
タニへトス、ソ給トし

おやうよおわりすぐさびしえ侍へばいと悲しき事の
昨日けふのちごと思ふをめくれとなひてかくうへ
なる事かなさちのいともきよしなはようくてへさへ
あう人まはさとふおもひいでなくまとかめ哉こえな
をりのき人〻はまつひ哉こゑこなるかもたひめん
志能ふおわはこのおとゞのうくぼんこ給ふ哉こえ
なゝめはをなまうゐまりしめする御心はしかも
おつばこ宮もすぢさとよ織なてえみたてまつ里な
いぬらげ哉を志なてはおすひたちし事を隔な
がちりとぞそなま遠なしさとなどの給いでばく
東屋しげまこそおかしすわしおわしくあつましか、

はまぢ〻故大殿は姫さま
三宮の思ひよりんあとのいと
うんきこゆるまとひなすまーなわたいを屋んざと
なくもえさゝぬすちゆそのそれ人うへなく
かもまゆーうばばよあどそうはさやうそおちを
まーもけゆゆゝまーとうちおわくはるにもさら
めゝわてうくゆんゞ後よ来こえ殺もさるべきゆも
わらんとなん思ひあどいはしらさいりきこえ殺
ゆゝ後ほよあーとゆがしてあ宮ゆもーまゝ後
ごはきりのよ思りまそてまぢわてすきはかーを
さゝふみ世よふび美はらんもいとつよなまうよ

なんとやゝ殺てイ殺りーげあるはくゝまなまばま
井てもえ来こえれもしをはうび宮人とのんしも
こえ殺んゞけやすたまを世中いはしうゆめたくのえ
ゆ殺うふまどり北は男殺ゝはわの心後はくー
宮後みえ来こえて人北はくーきのうちもゆるかん
殺をうう結わゝまを殺べさ屋うよはなかちかふはま
ゆは心やゆわ来こえんゆとはゆがさふ屋ー大殿
ゝゝ乃わの宮乃は元服のうゆがいゝくを二条
院すてとゆほをど大宮乃いをゆーきふゆがー
ふふをまとりまは心くくるーまゆ殿屋てくも殿
めて勝さうをまゝ殺右大将殿をりーめやまてはれち

ゆ中 殺仕大臣ノチノ
雲ノシナ南院ノ中ヘ
品宮ノ人打モ皆三位
ハ上ニ成三位上ヲ上ヲアト云シ

三条院ニミヤタギリ
元服ノ日三条院方
ヲアルジ方トヲ云ベシ

親王ノ子元服シテ
叙四位下一世源氏ノ
子ハ後也三四位ハ
別ノ儀イカ但親王ノ
子ニ准シテハ別テ
キボシ

人ニ四位ニ成タニハシテ
引タカヘテト思ヒ
又人ノ上ニテモ思シリ
タル日数ニニハセニ
ト思ベシ

ぬとのゝ[illegible]ふ上達部乃やむごとなき所にも
とゆてゐえのゝ[illegible]なんだあほゝゝがたゆも
わまもくゝとさぶへまよう[illegible]ども[illegible]くゝかけるう
まちわ[illegible]ゐ世捨すまてゐきき沸いちゝよ
い業をひなわ四位よりゝ[illegible]てんとれがゝ世人もうう
あらんと形もへぶをまゝぶゝきびいなぶかどを我
んゝゝぬうをたる世まそゝゝゆくまりなるうんも
中くめなきさぶうゝとなわとれぼゝゝゝぬぬは
ゐさまさて敵上りかへゝわ殺大きいあるずあき
ま業ゐとありふぶがあとりわりいもれ
うわをる法だいめんあわてゝれ事さゝん殺り

たゝとあうゐかゝ[illegible]ゝりきもまゝぶきよをひけうす
まゝうはまと思ふやうゐて大学七ふふきゝ
なゝいさむ乃ゐい侍るにすわいはこ芸をいゝ
ゝゝ乃とに思なゝてなのぼゝゝれかやをゐも
ゝうまゝわぬべま程ふもなゝがゝひとゝあわ侍
なんゝゝゝかきゝのへれうちりれひいく侍て
無事のあるさぶもきゝわはらばゝふひる沸おま
ゝゝひてわぼゝよなんをゝなれゝきゝもゝゝ
ひはゝゝゝうゝふ法てゝわはゝ人侍ゝゝなふ
きとをひゝ業んをきゝゝわぬほどいふゝのゝゝまゝぬ
ゐもきとふえ乃きゝへゝゝも孫ゝんをよゝぬ乃

おほくなんはなくなほはうのもきをやふうーこゝろこの
まさにあるべきーいかにかゝる義なりなんはまだ
まーてはぶくはさりわはだゝまゆうんかと
はゆくさきいとうーなめるふよわなんおもふ妙へ
をきてはるたゝ義乃ふとーてはうさうわ
んよかあひ世中はうわよなごまからひぬまたぶく
りんあとよりをきまーめんこといいもとをくあん
おかゆへうんめほたちまあうひをこのそんの
まくなほ家尊りのかわぬまたふよまんさうふ
世人はこゝるゆはうかまーろをーはくついせー
をきとわはゝまこうふなどいをのはゝ人ゝ

八十三ヨキ 聊アシ

わかてあんちあるやうなまとおうはまさほ
あまを人よちをくまて世おなるはすよは人よ
うほめわあはちはゝよかゝわおなる義なるよなん
はれはちんをもやゝしてこうやまとむーあ乃世よ
ちひちはゝうめつようはゝめさーあたわてい
んりとなまやうよはまともつ乃世のをもーと
あるべ来んまて世なゝひなはちらば成あんはも
ーはやをうほべ義よりわあんたゝをいはくく
ーうはなるもかくてをゝみはゝいせまわ
なる大学乃ーうとてわゝひはるひとをよも
はゝーーと思てふるふとをゝをゝを妙へむあ

日本魂ヒ日ヒ自ヒ カシ
ノムシ

除目四ホ八猶三内ハ三
宣ニ五トニ云ーアリ
メトハ大学ノ礼ニテ
年ノ気有テ昇進
セヌ礼ノ人係多ニテ
ハ早ホノ河ノサキシ
学ホニテハナノ年ノ
アナフレヌ礼ニトノ

ときこえ給へば、げにかくもおぼしよるべかりける哉
此大将なども、あまりひきたがへたる御事なりと
かたぶき侍めるを、このおさなごゝちにも、いとくち
をしく、大将左衛門督の子どもなどを、我よりは下
臈と思おとしたりしだに、みなをのをの加階し
のぼりつゝ、およすげあへるに、あさぎをいと
からしと思はれたるに、心ぐるしう侍なり
ときこえ給へば、うちわらひ給て、いとおよすげても恨
きこえけるななりな、いとはかなしや、この人のほどよとて
いとうつくしとおぼしたり、学問などしてすこし
物の心え侍らば、其恨はおのづからとけ侍

夕キリノ字ハ花ナルノ弁ハ花ノ養子ナニヤ
学生ノ入学ノ時文章院堂監カ字ヲ下ス也
シヤクノ礼メヘシヤウフトムヘ二字ニサス也
各此傳ニ二字ヲ付也
聖廟ノ字ハ菅三
三ツ台ノ清行カ字ハ
三耀トミ字ハ又
号也
古今作者文屋ノヤス
ヒデハ文ジヤトニ
夕キリハ源行トニ

なんきこえ給、あざなつくる事はひんがしの院
にてし給、ひんがしのたいをしつらはれたり、上達部
殿上人めづらしくいぶかしき事にして、我も
我もとつどひまいり給へり、はかせども中〻
おくしぬべし、はゞかる所なく、れいあらむにまか
せて、なだむる事なく、きびしう行へとおほせ
給へば、しひてつれなく思なして、家よりほかもとめ
たるさうぞくのうちあはずかたくなしき
すがたなどもはぢなく、おもゝちこはづかひ、むべ
しくもてなして、座につきならびたるさほう
よりはじめ、みもしらぬさまどもなり、わかき君だちは

ほくミハカセモテイラミテ君達ワヤキ人可笑ト為テ手元看ヲヨリテ改シトラセ

えたへぼ（卍）ほくゑまれぬさほハ為まゝひあどとまゝ
きすぐーほくまゝ花ほうぐをかゝえわいゞ
して為いゞなどもとゝを竹へまどすちゝとなわ
きるまゝらひみて丈夫なる民部ゑどの形なく（イ）
かゝけとゝ竹へるをあ（ハヤ）さまゝうゝめ出ほゝ
おゝすおゝりゝひもとあほゝ（主）ゝるゑゝさひざゝうま
わゝひぬきバみあわたゝ非常
ひざゝなわぢをひきてたゝ（退トスル可成）ちたゝうびなんゑどをゞ

いゝもいとおゝゝみなゝひおゝい為人ゝいめぼゝ
ゝゝきうわわゝゝおゝひゝこのみちゝわいゞゝち
竹へる上達ゆなどいゝたゝわゝかゝゝまゝほゝゑゝ
などゝほゝゝ（除ケシ）ほすゞほをおゝゝこゝけゝんゞゝ
なまふゝめゝなゑゝこゝゝ弘ゑく思ゝゝえゝたゝまへるゝ
いゝゝゝものいふなもせいゝゝとなめ巻ゑわゝかゝゝても
ゝゝゝむゝゝゝゝうゝのゝゝゝゝゝわをほゝかゝゝも夜ゝ
いわていゝ中ゝくいゝまゝ世ゝゝけち為むゝほほうげよ
さほゝうゝゝまゝゝくゝまびゝゝほけよ人わゝけなほなど
ほまゝくゝりゝゝゝよいゝとなゝべてなゝゝずゝさほゝしゝとなほ
わゝなわゝゝわれゝゝはいゝとあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝふゝ

俗粧ノ人ニウイセウセラレテモイカヾト思フ五人ノ河ニ軽躁ノ字ヘ

まことにうさうしまといはさまなんとは妙ひてこれのうちよりあらしてゞ帰ん〜〜ふ数さるはまふ座ふはるあまわてかへるわはりけるを大かくれもうれあふを爰このてはるわ駆はうるを〜〜どめて、まをりものなどゆるをくわうをくてとてまうはるをうをさいぎんどもめしてまるくぬ〜はくらをかと上達ア敵と人をさふべ義あまわをべえふかゝ先

四顔八分ノ侍ノ顔ノ字四つるを九二成

さつゝい粉かふはうをの人くを四のんたゞ乃人いかと〜城ゝ〜めたそまつまそ経白はくまたまふはうわふ影のもゞえゝくゞ妻情仕まをゝゞうふふ乃ふ為なまはあけをて〜拾ううする危中舟

ありしはうまはるふちいときまはげなふ人のこはるひ拙〜〜を神さびてよえあはげたるわとはりかゝ〜ふふとなる情仕なわくわ

見ヨリ先キリ〜〜

かふふたう義家よむまれかて世界の業花りわくたるまふかふべ義はふ力をもちてまどの無城むはびえたの雪をなゝ〜なまふ心ゞ〜のをゞまたるさ成をゝるのは事よようへなばらんてんくに

竹ヲ九枝ト云ルガト同海ニアリイカヾ愚ニ客ノ雪心可成一堂ニ對メ云ル可成

はくゝわはめたるるゝとふ面ふくも成ゝふももてわゝわはゝ人まかゝはなふ義乃文ども成とんんをはこ成世りめでゆはわゝふおとゝの御ゞさゝなるおやめよ去なるをとさんすゞれゝるを

生徒学各以長幼為序初入学皆行束脩之礼於其師各布一端
迎年弐三九遊学者之後情願入学不退事
多少也然向試其有通二経聰顔学生但諸王及従五位以上子孫
不乱学試

ちぢ（千）ぢ（千）きりうがくといふことをさうを引て
後ぢごの法乃国よりはざうぢ（曹司）まあ屋のゝ
ざしふりき師よあぢを引ひてゞ学宮せさをきわ
ゆくる大宮の師りとゆもおさくまうで引りを
よふひうはくゝそて城ちゝよやうゆのゝまて
ゆ一巻こえたまへまだ（大宮）こまそいえもなゝひ
ゆりゞとて志ぢゝなるとゝ法ゆこゝ者なわゝわ
一月みみさびたゝわ城まりわ引へとゝゆふ
巻こたまひゝふつとこゝもわ井引ひてゝふきき

（双紙 学宮）

（集日本紀）

まゝよとのをたゝくゝもゆりまたゝれゆくきゝ
ゝでもたゝきくゝゆゝのゞわ世よもちゆらゝ
人いなくやいあふと思ひよえ竹へどゆほゝゝの人
ゞゝまあやゝりあゞゆきたゝる而なくゆはきが
いとゝくゝんゞていうゞさふゞ義ゆゝたとくよみ
てゝまゞらひもゝ世ゆもいゞたゝんと思ひて

（タノ性）

たゞ思ふ月のうちふ史紀ゆゝどゆふ文はよゆ見て

（ヨワキイツキ）

史記 司馬遷作
本紀十二巻表十二
世家卅巻列伝八巻
伝七十合百卅巻也
擬文章 得業ト云
八帙ワメテ八十三巻也 寮試 花云史記ヲヨミシル人能ヨミヨメル人ヲ擬文章生ニ補ス次ニ大学寮ニテ心ニフル及第ノ人ヲ文章得業生ニ補ストヽ
夫ヲバ貢士ヒ進士ヒ
云ヒ是ヲ大学寮ニテ試ニ及ヒオスルヲバ擬文章生ト云ヒ
ケイノ大将ハ以中ノ
以下ノ三人タレヒモ不知

大学寮ニテ初ヨリ学文ニタル人ヲ試ニ及ヒオスルヲバ文章得業生トイヘリ
長ニ音ハ諸国ヨリオクリ来ル人ヲ貢ニ奉ルヒリ
試ニ及ヒオスルヲバ擬文章生ト云ヒヨカハ計ヒト…大学寮ニテノ試ニ試ニハ史ヲヨム

まんまてんをちを好まの大ゆ左大井武ゆ大浦
左中井などゝゝわして法師の大田紀をゝて
史紀のうゝさまの紀くまきゝうゝんゆゝゝのせよ

（タノ師不知人）

うへさうべきよりくをひさいてひとわ
よまをまわるよいさうぬくゑなくうくふゆよ
はしまん妙へふさゑはまるしのこゝばあき
ましきまでも歌はまゝ大学ニ可入歟ト
はまとふしもくゑれとうはふ天ねいまして放
あとゝれりをまうばとゆえいてくな義ふ歟と
えんはようあてなしおりどんとしてうくなな
あうはけまなどのおてをしれゝひゑをえる法師
のんちうまくめいがくあわゆゝ思へるゝ天ねうう

子イオトナブル――花ミチ成ムニシメクヒテオヤノ云キオアラハ」行フスシエノハザ」行ムニ行ムニ戸親ノ子ニシトリモテ孔ニ入源氏人ノ上ニテ見ニガ我身モ今ノワウニテハ
タギリニシトルベシトノメニラヲ大将ナドノキハ位ナドニウワノシクシムニテノタニラ月ハ入ムえニハハカナキオヤノサヤニキ子ノニサルハナキトノメニラハ大方ノ一ハ今ハ
テノ玉フハト……
是迄泣ハ胸ニシタリ去ル親ノ云キオアラハ」行フスシ行ハザ」行心ヤトスルトハ
愚方ニ

源氏

原ノ行キ

なわとえんやはは行ゝ　とうこの
りわえまゆくういをがくなゝぬ歟なゝ世ふ

ぼふうおへばいうう思ひ　まておふうかつふ
いと面をくゝ世のひゝもれふてざえれ程よわハ
もいゝまびすをくてあまゝしくなんをゝ面を
帥　院ゝうはあわてかくとわ口義めゝをを
るなわゝわ方ふあまふまでほうへわえ歟程で仏
法をのはとをまはちまちりあ歟うへるとわも
ばまてゆくはち義いふゝぶ人なき帥がえゞ
あんあゝ大学りまいわ程日い程うもんり
よ法華のは車ともうばしゝをほとひさわ不
うゝ世ふ知わなる人あゝゝとみえたるふふく
をうはれていはくゝ流りはいわ程へ原くまざの

冠者ノえ服後ヲ云

朝廷ニハ其如爵位賞
莫如齢〻〻けんか
又此寮ニテハ人種
姓ニヨラスニヨリテ
座ノ末ニ成

昔院エテ
良相儒者ノ誉カー
ニテ其国ニ好士ノ多
集ルナラヒニヤ

西三条
前ニテモラロストアル可又云
博士ノ作法ヲセイスル心

文人擬生　学文人ヲ国〻ヨリ奉ルヲ云シ河海ノ今案ニ文人ハ文章生擬生ハ擬文章生トテ文章生ニ擬スルニヤト云〻
花云史記ノ五条ノ中
三条ホル上ニ面ルヲ擬
文章生ニ〻補スルヘト〻〻カウフヨリ初テスガ〻シニナヒスニシタミヘルト〻

人おほくなんあわ業はし
すどもまわう地りめはかくまうたて竹人
まはひとへりうはよいまて師も身ほもいやく

内記

メキリ

りけみまし好ふ殿ゆもなはくわたげく博士ノ人
ともあえたわはべてなるりつけてもをこの
はちんの程あうたはく世よあん省ノ原ノくて近井
竹ふべ家と所宮如はをまうい母宮ものはうはとと

入テ三年后不宮ノ

帝王ノ娘必係氏姓ノウス雲ヶ又斎院ノ行モ源氏ノ必係ノ姓不在ノ帝王ノ娘ヲバ源氏ノ姓ト云シ
天照太神ノ春日ノ八タクセンアリテ大織冠ノ
ホノミコ白ニ立孫故実
ナリ

ゆつわやき弱ひ　うバとあ〻〻きとはを竹源氏よ
うちもきわは花に井　弘ノ女　弘殿ノ女ノ人すわさきう家弱すもいうなど
うちくにこなるりあるさめんをゆゆる人〻がが
はりあげわ紫ノ文化ノ人ノ共新ノ宮ときこえ〻ハ武部ノ
まてはは対おはまはてあんことな義はがはがまて
おはすあはむまをあかいあわて家弱へるまがはの
ハ四ノ
計ト月位

王女御 友女ハ トヽ云ヿアリ　源女ハ

王女御もそはちふひをおもひくいはあうるようて
ふてしくおほをべきかうあのおりまきぬ
はかりのうをゆとあとよきておはのはー
うるべくもとわくふおがーあうひふれどな殘
梅ばがぬ殘ひぬはさいはいのあくひさうへすぐれ
ハイハイトハ殘ノ自ニ引メガ目ヲ云フヤシ
仕奴ノ中ノ文
源太改ニ上リ給大将門公
ニ了拾付例
天智天皇七年大友
皇子任大改天迄二
年忠義公兼通永
祿元年中開白通隆
正暦九年帥大所伊周
公皆太改ニ上リシ例也
殘へるとくるを世の人おどろきゆ思おとと殘大はふ
はのはて大将殿大はたりなるはぬ世界のまはた
まはわうちはべくゆはわきこえ殘人ーいとはく
ようよきくくーくそんちぬなどもーこる
殘ーはふ学問をたてくこ殘ひはきばぬんふぎ
ぬまはなるひーうぎおかやきぶとようーく
枕ノ巻ニ見タリ

中ノ女コキデンノ外
合二人アリトシ
雲井ノ上ノ八帝夏
ノ巻ニノ又一人アリ

なんりくくふはまとも十家人おとあびはーあは
きはふもつぶくくーなわいではくをとくばさうん
たるはあのうちもあいあはあはをとーあるむあはー
くふはわのむどなわりくうてあてなるはちいおとふ
まはまとうはあ若梅家乃大殿云のかかよ歳て
さむうひたるあどもはうまどおはくなわてそれよ
まりきてはのおやよゆばくむいとあひなーとて
とわりれちまくこ殘て大高ゆあはきゆえ殘へるを
くふあはよはいとくよなくおりひおとーーきこえ
ゆまうへまとと人くかあはちおどいとうはくくーうおを
おりーくふはきをまの若ひとはあてあひいそおるひ

かどものくすりはほうわうをひてねたりけるをとめて
むすばまゝきゝ人なまじ物ゝ[illegible]
物なわとちてかたぐきこえおひてけどをくあわも
ゝ[illegible]ぬきなんちは思ふ事なまゝうもあるもの
ちうなる花ばなゝりはりそもひぬなあるびのつ舟
せうをもゝんこゝろはまはりまあわきそんざーを
みえ来こえおへばいかゝ思ひうはしてけざ屋う
まはゝもちぬ来こゝろはりもどゝ[illegible]ゝうい
まうさはんどちなまは年はんあるひおへ原佛
ありひ[illegible]ゝもいうぐいはもてうれもーたなあ
まえんとゝるゝ女[illegible]ちうなるゝ[illegible]あくおきなく

おはけはまゝぶおとこいさうもけなきかどくん
ぎゝをまゝおかをなくいうの成ちなゝひふりきくん
ゝうくゝなわてはおきをゝ[illegible]心なく思ふべま
まゝかゝおひなほてけあひちぎうはゝきりて
う義のりーまゝうゝふゝどものんおされくそをの
ばゝゝおちゝふおわはるを[illegible]ゝけ人くなのく
ゝまゝもわはまゝど伝のうゝかくあうゝと旅ふもきこ
えんゝかくゝはゝあ原べゝ[illegible]の大聲おゝもも
ゝて世界ゝ[illegible]ゝうぎもなくけど屋ゝなわあふ
ゝ[illegible]時ゝうちして嶽のうゝは風ゝたゝなゝぬ夕音ふ
大宅ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

きこえおよひて御ものなどひうをきわかふこゝやハ
よ海所の地のとまりおはすまだいづまめはさへ
まわかふひいかあり女のきさにあくさやうふまど
（門云うかわ流比色コソ女セニニウメテニクゲシタル所ノモノヽトヽ）
（能下心）
ぬうくしき地ふ侍れとの世りまことしう
はさへふる人おさくはゝかるゝ世なわよ所のみこ
（ナニフミコクレノ源氏俗ニナニヤカヤト云心ソレヲ取ノテヨル）
（クレノ子ヽトエ手シカフルヘ源氏トハ母ヲナシテノメニフヽ）
くれの源氏などりゝん孫ひて女のなりふはあ用
きおとゝれ山里よりあ遠ふ八人ゝいとよとあと
ゆ侍きものゝとまりゝちはは侍まゝ来りなわて
（上手ノ示トハ入道延喜ノ手ヨリ傳タルト云ニテ）
山ゝはよて年へふるゝ人ゝりてさしもひゆきゝ
ゝんのよおとゝいとんきとふあう思ひての孫おわ
おるゝ侍れとまよまわいあそびのゝよけゝんいおう
（大言）

ひろうあはをうまあまふかよりはるこうこ
はまひゝとわゝこめて上手ふなわきんゝうめはゝ
（無道ニハ上手ニナラストヽ）
しきうあなどよひて宮ふゝのうゆきはゝ
へはゝうはもうのゝくきくなわりくわやと
（ギウサヽー 桂文ウチコトヲトヨムヽ琴ノトキハコトヲトヨムヒハノオハヲウトヨム）
（大言）
のゆへはゝおゝきふはうひよはふさいまいりうち
（大言）
うへて侍はやうめでたうわゝふ人なわやあひの
（能女俗身ヲヘテヤワシイタランヲ）
世ゆもあまんらぬ女ゝをまうけさきわて分り
（末イ）
（我ハ九ヒモセクヌニ人ハ嫁ヲ特ヲ上ノ人ヲ云ハンヲ）
うへてもやはゝのゝはゝはゝ侍ん事なきよのはきは
（アカシノ姫ヲ蛍ニユヅリ侍）
ゝ海をきそうもなうはへ美人なわとを侍るかど
りの侍ゝ侍ふ女ハたゝんをきすわもうゝ世よ
（所問）
ゆちぬらくあれよ侍へはきなど人のとはは出て女
（コキヅシ）

はと〻〻うハあ〻ど伊勢物語の9も人ふをとりていわひ
出ぢあ〻と思ひ弱ひ〻うと思もぬ人よをきれ
ぬふすくせゐあん世ハ思ひのかなるわかる思ひ侍
なる山恋をたゐいうでおりふさまふえ〻侍るむ
恵家の御元服たゞとの事りなわあるをと人
きまび思ひ弱へんさ〻たるをうふふさいたい
ひとのり〻のおがきうまきれびをゞひぬまきをも
物へらん〻ま〻てきに弱ふ人あわゞさくやとう花
ふげまあへばなどあさしもあ〻むこのおりさふ
ひちよ人いでもよ〻〻弱ふでやむやうあ〻ゞと
あれかゞゞよ思ひ弱て女はのは事思ひたちいうぎ

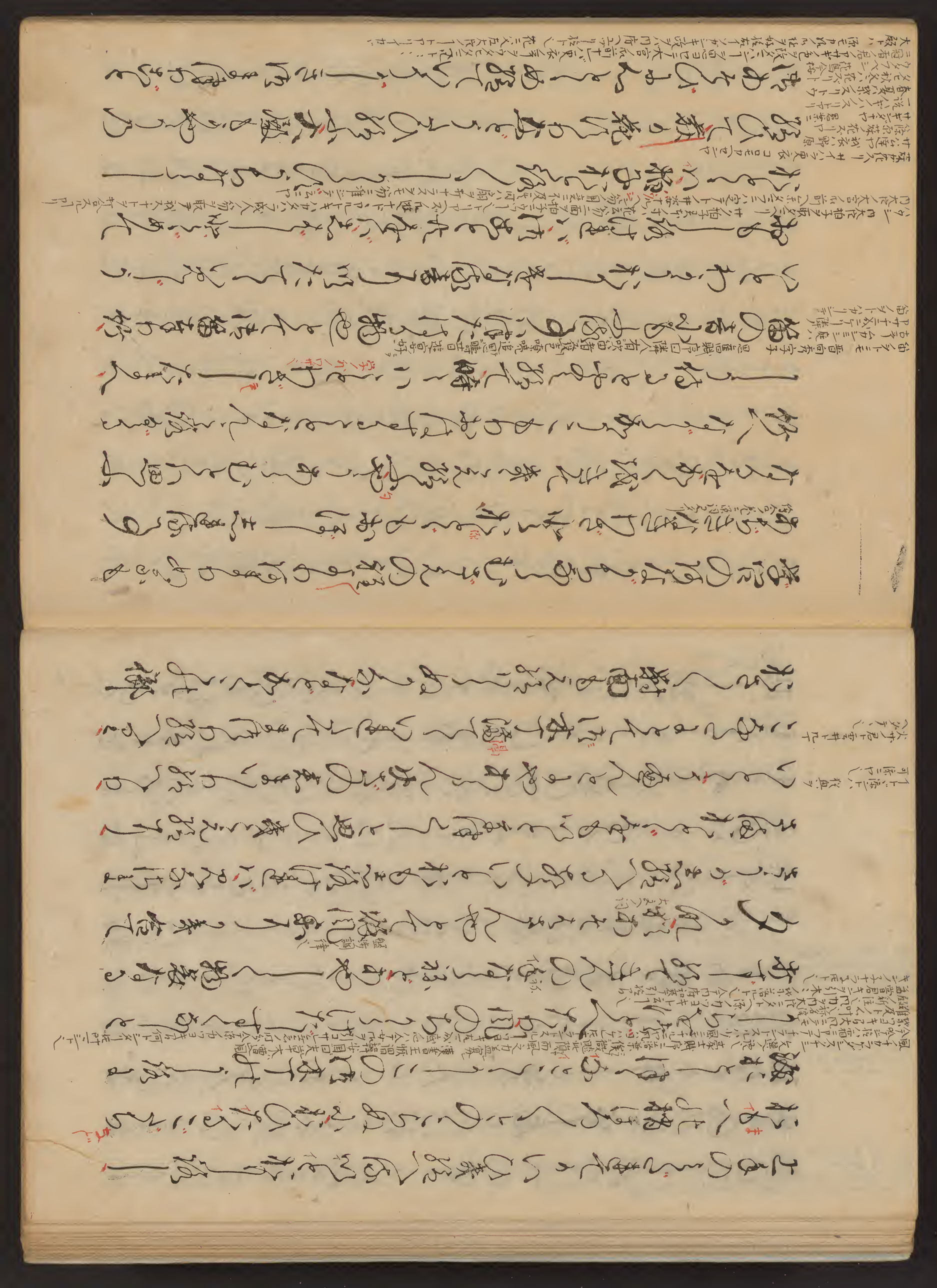
大政公忠仁公ニヒシ

弱〻物をれたせまゝうばうくあてひがあるる
もなる〻まゝなどは事よてゞあうさおしゞを
う〻めゞげよ思ひやえ竹へふ姫恋のはちまのひと
きびハようぼくうてさうのはことひよたまふを
はゞ〻のさがわうんざ〻などのあてふなまあう
きをうちはもわ弱あゞたちらひてはうう〻はめよ
てるかさわ〻めはゞつぶようぼくゞげまてとわゆの
てはよい〻うはくわたるものゝ人ちすふを宮も
弱なくのなゝとあがゞたわう家ありをなどひよ
をうひ弱ひてをあわ弱はおとゞ和歌ひさすを
弱ひてまちよ〻〻への中〻いはゆきさる弱さる

取由 父ノコトノ取由シ
取ハ左手ニテ糸ヲアヤツリ
フーカ由ハ引ヨキテイヤ

カキ合 父ノコトヲ
ハラリトカキ合スル
スガヽクトロ〻シ

リヤ所ニアヒタル人
唐ニハ律呂日本ニハ
呂律ヽ伝ハリ・ナラ
今テダクトヨル〻しかク〻ヤキ和琴ノ上手成ニトしなり面白



どもをべにぐしなどわらはなわらふあちきなき世り
んのりわざにしてあるるーはなまかりけきなど
の弱てはあるりけまいりわるよくらうなまばはかる
ふふるまわ御湯げきくるる物などはもくるるー
めらびめえはおなるりわーまわるひはえ井て
けどをくまてあーかひはりはかりはもきうを
きるーはいまいうよなくはてきえるふをふと
わーきうあわぬべきせふふうとちうはかう
まるふ大きの御うるのきびんどもさーめきるわ
かりとぐ出はぬるやうめて思びて人よ物の竹ふとて
きるへるまるふ弦屋をるいかるるて出竹ふみちふ

左傳云明君知臣
名父知子

かるふはるめる事をきはふよあやーうなわるて、
はべるとぐめはへばもるはうんをるいふふーこ
まわたまんどんはやよをのはるるー物たる事
ありいでくるりめきまるどもるとふふうるうな
めわかどるはきーはるふあきまーるきうふされい
よ思ひよらぬ事まはあるるもどいはけなまかどよ
うちたゆんて世いうきはふかるのれと気をを
るぐくとんえかんどもをでは出るぬはは業をふ
業のはるのめーきめるはハムこういでさをるひは
はきはるるきのくるりかりまーはうんとさんへ
あるふはあるげるるとふいひあへるさーめさるとれ

人くはいもうりにお書のうちうよめき出はるい
出ざうの表のかりまつりふとうかりひつまはな
むこはをやさわう事やかりの表こうぼらん
まぶり表御ん殿と俗はへる殿ハそちをぶら
御殿をふいとくちあくあきうるはらまど
めはこしげなまわりひり世人と思ひいふべき表
うるかとこのこのそ女はは浅なこまぬめ殿ふも
はこさわくらはこ人うまさ俗事もやとうう
思ひつまねたくもはるうなとおがを殿のは中の
大うふは者もやもいとくもくはなこうなうう
のかそいいとえやこ竹ひこおもおがいそて

心うはまい祝覚ちもそあうう殿大宮もさやうは
気をいは殿ひうん物を世よなくうかまうは殿ふ
はもまこうそまりをそえ殿なんと人くはいひ
気を城めざまうひうとおはすはは心うこさて
はうう御ざあざやさたるは出殿御ん殿め
ぶうこ自ぶうのあわて業わ殿へう業わ殿はい
大宮もいとはんはようまこきはかがいうは殿
はまひうひはくうひうはうこ御こうはき
なとまわうへてこなぶうもうこはようはふ
ひとざはなまはまかなひうはげみえまわ殿御うは
うきはこうそこにさあ山もりたなくと人く

いうふゐはらんとんをうまたわたらくくしき
ゐよはるのどせよはるむあわはめうれせは絶
きしもあがはるなきへふそなくとあうおりひはふ
きうしぬものうゑよそうめーと思ゆそうを
ほべきあとのいでまうてきさるをかうも思ふ竹人
しとうのいおりふたまをふまをな綾きぼめがさく
おわこはてのんと波をしのごひはふ言けさうー
はへるはかのいはたるひて御めもあかきり
なわぬのやうふふとうりてのはさうの数の
すゑりんとあていおがはふらんかう業こえはも
はをふのりーふはうけよ

おさな義あれり　まわ城きて方ばうい中ーおき
なくうわゐ竹へあはるすまばめふちう義まーらひ
おどくくきうぬ城ん春へあばさいとあえ
はばさわうも人とあうを竹ひてんとたのきわわ
はつふゑ思いばなる事れはけきばいとはおう
ふむ微りはあのきてならぶ人あきいうくはは
猫をふめきどきてーきねどよがふい人はぬ
思ふ歌もおりはるよやうよなんはうわの猫めも
わーぬなばーひりばふ志はるをのれ人のはたあ
ふもいとうさいおるまあるさーりれききくく
きうめばーーをはるわたわよはめりうもて

なきふくるまでうれしけれどゆうべもはべりしけが
ゆゑ幾ばくまして行くすゑもきてあはせぬなんさる
ものかの事をあんとたづねをひてこゝろさしは
なてあり給へしはてのしげけるまゝとさをてうち
ながめおきあきの人々のこゝろはなをて御覧じ
たるかたくなをんうく思ふ給へかなとまを給へ夢ゆも
さわ給へりぬるものあれはあきまうあげてはうう
の給もとりわあまとうけてもはしの人々のまるのん
なむさわ給へざるをくふ給へをいとくちおしき事ハ
こゝにはうまして侍あけくべく給へきあはれ給へをを
あゝを給ふさうゝ給へ侍事をなんをわ

まわ心ゝとよ思ひ給ひてうゝ行ひ給ひいさらぬ
事をもまくれたるまよあもなむ給ふこゝうう人
さまに思ひ給へ給へ給をなき給をんの給へをふまとひて
いうさ給をんとい思ふゝぬるものはなんさてもたま
ふ給ふるいやまくんようゝぬ人のさまはは
てきハけくおがの給もあちなくむなゝお
るまそ人はこゝやをきまんとの給へ給へのうき
なるとふり侍らんさぬゝふりふ人くもりれい
ひふもどきわゝふべあめふ給へをいとくちおゝく
屋にかゝば思給へんらるやとたちぬんさまふ
人いそゝうゝとあゝ思ふ一夜のさわうゝとの

人をいはまーてんちもさのひて何ふうふ所もあ物
うちをてんかゝ思ひ
んもなくて世はひふよさ
あうけあふ所さ海と
なぐ心をきなくものし
うく人なくくりと思ひ
けうふはきとて御めれ
ぎとえんかあーうのう
いつぶ姫もなのはゝわ
ふもあめきと気をとわは
ようめうまいあきられきまーつ

（河海ニ敦子門親王ハ延喜御娘ニ村上ノトキコキデニ三位九条ノ右丞相シビテ通ヒ侍ケルカ後ニハアラハテ条タニフ閑院太政公公季ノ母ニ）

年

はれりまはる我はういいとけあさ内程を高乃
ほあてふーよわさーすぐーてもほやえてさきんと
うちあけあてるーぎくこほるを形とくーたうわ
よわいけざ海のなほほもてあーよ歌あてはあふに
わのあ人とてもうちまきまだみいふやをつよ
なる人もおいほへうめふを夢りうされさる赤
おはーまさめきはちうり思ひよーざわる
ヨとをのがどちあげくよりこりーの新ヨ
もうさーかくきほるまーさうなきとん孤屋わて
あーぬ事とぶまいひなきれよーこふわー
をわてんえやは帰ーうる孤乃いをはうきなわく

（去ル年谷十二アニリ後トテカテヲクトテ首尾ニ今年タ十二雲十四）

さちはさわともいとうまとーしもおもをれざわ
きんとのおもへばいとあはれ
ありひてはないそーよ中ゆもうまーくの御覧
さへおりひねもすあそたなまにくもたく人のひちを
なるれあはーしきゆの思ふ竹へかりんを書きう
ひあをはおりされげなるはさはかてちのよ中竹へ
どもかいあはべ義よもあーもばう地なげよおていま
しそりいさはーよなわ竹まーおわきすべーむと
志のひてさはべきさちの御てを大を城乃を恨義こえ
御をはいとくおりーとおはを中ゆもおりとこ志乃
はあなーさはすぐれ御よやあんかーはの心のあわ

ナドカーー　内フハ雲ヲ不思氏大宮ノカク女ルニモト思ヒイメハリ枝尤内フモ今ハ北トし

オモヘド、ニゴルす雲ヨリミダ事ノト爭リヲ思ヒモトし又トしスミテノオハタヨリニミテ女ルニモト雲ヲ思ヒトし行モ大ゑん　世中人

はもうはをーう和尚さあーよなきけなくちよ
あまよりれやうふあがーの御へはをなどうさーえ
きべ義かとわいーう思ひはよ御中なくてかく
まをーはうんともはほーはーさわーをわが
かくもてなーうあたまばうまるのはるのをも
れはーうけたあれ取キガリはーたく人のはくせ
あーを世君よわふよはさはべ義人やたかーちあわ
はまよわはーめてひとーさ人あはべきうは光
まわをよびなーむきてふまめとちう思へどわーん
ーのまきまばよやれとはうーはうー思ひ光
御はんのうちをんをんまわーてーいうあ恨やそ

ぼうもむくさばうるらんとも
おもへるを人もえ思ふ事なもえゆるし
なわもうばつるまわも思ふおもわるべきはけばかり
ぼうるあはすたるおもわるべし定例たいひきうせ
思てまちよろこびおをまあたちて物語などゆえ
語つ申でよ侍しとふまわ思のおもしれえんじせ物
しおもうばいとなんいもおもわしきおもてのしけ
なきうをも思ひうめ侍て人り物思ふを語侍
べ義がんをるしき事をうもやえしと思へ
きふ侍ものこわ語をたる屋と思へなんとはきえ
おへ侍こ語よめくわるしとおすちはきはふと思ひ
らわぬおもてあかきてなるまを事ふりおらんきぼの
なる歌ふこまわ侍すおはもかくわ人はまはは
おもなるおうらみ語ふべ義すおるしとなん思ふ
竹ふ侍とていもそばとと思へるるきと忘ふ心
るるうそういはまわふうのきたまくふ
りわまてことうはいひふおはばかくふなともも
みよりん事おもうきなめわとおりふふいとあげ
しおまいわなとしふ竹へどさるふ第でねおひ
めふ屋うなまど心も空まて人おまは語りなの
中陣ヨクト雲ト一日一歌
ぬ一とひらときぬはいうとまさーうさめなども
きぬをつとさーて人おをもをばいもこ語ぼうく

風生竹夜窓間臥
月照松時臺上行

古今 霧深キ雲井ノ
雁モ我ゴトヤハレセヌ
モノハカナシカルラン
此ウタヨリ雲井ノ
カリト云名アリ

覚えてさうじによりかゝりてゐ給へるに女君も
めをさまして風の音竹に待とられてうちそよ
めくに雁のなきわたるこゑのほのかにきこゆるに
をさなき心ちにもとかくおぼしみだるゝにや雲ゐ
のかりもわがごとやとひとりごち給ふけはひわかう
らうたげなりいみじう心もとなけれはおきわぎ
させ給へ小侍従やさぶらふとの給へど音もせず
めのとごなりけりひとりごとをきゝ給ひけるもはづかしうて
あいなく御かほもひき入給へど哀はしらぬにしも
あらぬぞにくきやめのとたちなどちかくふしてうちみ
じろくもくるしけれはかたみにをともせず

雲井ノカリヲヨム
ヨミし 独吟ナリ

身ニシミケル 哥ニ
風ノウケテ云ん
六帖 吹クレバ
身ニシミケル秋風ヲ
色ナキ物ト思ケル哉

さ夜なかに友よびわたるかりがねにうたて吹
そふ荻の上風身にもしみけるかなと思ひつゞけて
宮の御おまへにかへりてなげきがちなるも御めさめ
てやきかせ給らんとつゝましくみじろき臥給へり
あいなく物はづかしうてわが御方にとく出て御文
かき給へど小侍従もえあひ給はずかの御かたさ
まにもえいかずむねつぶれて覚え給ふ女はたさはが
れ給ひしことのみはづかしうて我身やいかゞ
あらむ人やいかゞ思はむともふかくおぼしいれず
をかしうらうたげにて打かたらふさまなどをうと
ましとも思ひはなれ給はざりけりまたかうさはが

うはべよき事ともあらはしてつくろふ法師御
ぬしをいとうしあはせ者にこのまほえしともあるより
なりはをとあびたる人やさふらひ義ひまをもはくわ
出しんおとこ共もとすこし物ちられきとのかと
まそたづいとくちおしうとのみ思ふ（ノ前ノ人ニ云ヘシ）いそ
まくよ家わおりは言をいとはしくしと思ひやそ殺
小すは家ふるすなんと気さもてをまわおりは
たく大うさいとむつうしきをよそ中宮（門府門）
ちかひきとまそ家わおへふるよ母はの母平思ひ
志めわて殺しおはまちはくふるうむいふふ
（女ハ里住ノ人ハ宣井ヲヨバシテ）はをもはきをわてこ後風
風ひくうちあしまををしん

さはがりまへつとさをかふてうふふ
形しまはめまはふふ人へくもちふゆふひきは
くふうひきをふめふゆふのおて係よはうてさを
まわおはいと後もゆるされ歌をまむ原うわおふて
うへい志ふくりあり物りたるを志のて御
むへしおふつまくふかさまんを姫（宣井）志わさ（ヨビテ）
しそも後はよあそびなどし竹へ宣にあ原をまわ
（サクジリ　タノイハ　花ヲサシヲタルタキリノミジリニ井ヲトシ鱗ノウヨヲヨキテ角ニテタルキリノ人ヲトノ人但メシカナルシハウコハネ見サシヲタルタキリト）
るうはやすきまとさ（ト）（タキリ）ひとわれよひたたる人を
まつそをのはちけちう義もはひなきかとり
かわにたまをあんとやそはてゆるわしさえ
おおきいとあへなしをあはてひとを物をそれ
（大ヌ）

ふこなくなわるてはいたもさうくしくこゝろぼう
うしふうれうこれ君はえていろ所のう
ばよれと思ひて四蓋よはくて老はむけりさも
あぐさめんとおもひつまを思ひはかへそあわて
おりあはもつくなんときこえ給へ御うこ
四方ノ国ニ隠サキウラミノコラエヨトメルニトシ
まりて心よはうしおりふたまへらくまをハし
なん思ふ妙へらくとくろわゆえうをしよなん
ふくへそて思ふ給ふことハいのでの侍らん思ま
さふふか世中うしけまて世はまりてゝはふ
いもはまくうりおひてゝほしはまばらゝ
くうえ給ふをもよあうびわざをもし
あぐはちめとおりひ給へそなんあうゝはまにりの
しはとそはくみへとふうをたまへ所はなり
ふはよも思ひゆそうをしとや給へはかうれば
なちよふしたとめ奈ゝ竹ふともはほしうん
すべ我はんなゝぬりいとはうまとくちあしうわが
されて人は心ゝうゝき物いあまと心
世ふも我ふ面ざてゝう空ましうわゝふうよまる
さもあうえあゝ発おくのの物乃ゝ後をふあうもわ
給ひなゝくゝわまを思むしてかくいそわすゝ給事
ハフノ示こうて是ハ示よりゝ後やはよ事もあゝしと
おなはは此給おわしも決ざの表給へるゝり

師のひまやとさしこゑはいとうかのめをゝ弱なる
くわ国はしこくしはしは車はしはなのまだんのためくり
たなくて屋をそめくまてはけがはすよいわの弱へる
四乃大夏の玉垣花が物が物云紫房の花は信大夫などは
いふもんかこうまはまいわはきひれれいろみをの
うは花ゆは一路りをと花は一路の菩薩中物云めどもこと
はりこうまとは夏の御もそのまのまよいはも
家わはかうまはわ路うりひんこはなまは花の花は
ともしさはこくは家わ竹へ小ぶさの花よいふよかひ
なくうは遠大宮の花うはざしもなずゝえむなくおが
たるをたくこは小花をかはけちうはうふ義もはに

おがうこはきをはうるうこはこさうこはこさけばうつをこさ
物りあがこわはるとおくてわこわひなんが
いとさうくこきうをこをおがは屋はとのかとよ
うちこの家はてタはうこをさむうんかをわはらんとて
出はぬんふりひあふまをなざうふいひあて
さそりやあこまとおはきをおいとんやまこ花
人乃はは花すこもはしくくはなんようこえ
なこずんなこてを花は心ざこのふりさあはくの
をもむさはもんさめてゆふをとものこさなる
やうよもてなこてはうあこめをひこいさむとも
一歌をてはおきなきんのまこりはんこうこうこう

あるめ宮もよもはなどもちふせいりのはるゝあゝ
とおがをば安倍の御つぼねくにとはきてこゝ
ふもしこゆもおひらうふいひあてわて路也
くわ宮乃はしもとそおがとくうゝ水も志路りめ志い
さわとるもんさしのかとも志わ路らんわてわてみえ
路へとゆえん竹へまばいとおかしぐるひさぼくろひ
てわなわ路へるまゞ四よなんおはうゝ路ゆ行わふ
みえ竹へどいとこめしう志めやうふまぼくゝき
さは志竹へまうゝさけまゝはゆ雲井へ見ましてあ
うび通よ思ひやこうふをさうくゝしもはるべ家
れおわすくゝ家殿乃かとめて沖の殿をえりは

まゝき事堂家をこうおりひはまをさゝゝはん捨て
うはろひ路ふやいのちなゝむと思面ばいとあう先
あまとそなゝよ路姫志いそぼくさうをおぼをは
かかもゝ雲路りくたゝなゝよのゝなきはおとこ
志此はめよと家まおよ志いそきそ殿一志とこう
たのゝやゝさうをはまゝくちおゝくわゝらを路うゝ
殿ハおとゝさ殿りおゝなるゝと殿りまはとも
さやうゝおがなびうを路なゝやゝめな家ゝの
まばいよくゝそゝうゝとおはゝゝて物も此路りば
いそもはうゝ家殿ふきえゝまう人のはゝくせ
すくきのゝとゝさめ殿くとの路いそ屋物きあゝと

はふぼうの家こそうせぬるよはめわうさわとも
ひかの表や人りをとまきこえさ竹ふ心ぎこ
めーあちをとなまんやまーきまるいふ歩ぎの
表相のうーなよいわのてえ形りんれとがめんも
よ紙りき時こうこ高ーうのはきいと心がうて
海なーのこひはふなはとほくきを出めといと
心高ーうて高とかくきえたらわてわ日
普の人乃はよひに射面をちを形へるこうこんよあれ
ちうーく橋ふまて物もいてなき形ふれとこれ
はんのいとつけもびさりきわひやんあんや
思へかう意ーうれはをんちうわわなうほべはき

ふどてすこーひまあわぬべうわはる日はようり
面ぶてはーむやれ形さはもいとわのう義げなきば
まは紙もさあうえあーめやれ形意しといれかなん
やとの形へば形こーうなはなよ形ふさよもれさあけ
なわ事となあーあわ面まのでおまふ巻りひちち
たくをひのーこるはきのあうよ人くうがやなど
形ちさはげいやれ形とおかてわなく業形
ものはけれはとひさるんよゆるー家く形りも
はめのとあわてりとめを形り気を城みてはなん
はよふやがよんやこーを形りぬすよはわーさわ
くわと思ふれのとはーうきいでやうめわくふ世うれ

六位スクセキ五位ノ人ハ又五位ノ人花ニ集位ノ心し

殿のおぼ[illegible]の殿すいさ[illegible]めもやてず大納言殿(雲ニ父)めも
いるさきを殿りんあそたくせ殿乃姫の宮位すくを
ふとつぶ屋くもあれ殿きあたゞは原風乃うら殿よ
たづきそあげくるわ乃ゆ[illegible]れとこ君殿をば位あ
とでそこるあれるなわ乃ゆわとわがせり世界うら
殿ーけまゞ殿もはうーさせるんちしてめざま
雲井ノ位
夕月
りきたまへ
竹の海よふうを袖のをあきみとわとやいひ
志原へ殿ーとの乃竹へ殿
雲
いろくふ乃のうきわとのをるるいうふ
深草原中北殿うとのの殿うそぬふ殿入竹へばわる
雲ノ住所ヘ入ル殿トし

なくてわるわ殿ぬれとこ殿いをとまわたるんちも
いとんわるきむもふさうわてわのはすり殿殿ぬ
殿車みはるるわふて思ひやうふいう雲出竹ふ
けりひとをもを殿んふはけまゞうやのたまへもち糸
竹へとはまゞ殿ねたるやうそうふよも志殿りまを
なみをのとゞまるゞばゞ殿ふうて雲のいる
志殿きいうふ出殿ふうちりまたるまんと人り
ひえんゞ殿りゞ殿ーまよ言るをめ志まの殿りまゞへふ
めまゞ心殿ゞき殿ふとていう雲出殿なわ乃乃乃の
乃ど人やわなゞ心殿ゞくゞりひはゞるふ空の
雲ゞ殿いるくもまてきゞくゞうわ乃殿

五節 毎年十一月 ・・大嘗會ノ年計ニモ不限
惟光カ娘也

霜氷うたてむすぼほれつる明ぐれの空かきくらし
ふる涙かな大殿にはことし五節たてまつり給ふ何
ばかりの御いそぎならねどわらはべの装束
など近うなりぬとていそぎせさせ給ふ東の
院には参りの夜の人々の装束せさせ給ふ殿には
大方のことども中宮よりもわらはしもづかへの
料などえならでたてまつれ給へり過ぎにし年五節など
とまれりしがさうざうしかりしつもりとりそへ
上人のこゝちもつねよりもはなやかに思ふべか
めるとしなればところどころいどみていといみじくよろづを
つくし給ふきこえあり按察大納言左衛門督上の

アゼチ 云先祖云 井ノ乙ヽ父也
左衛門督ハ内フノ也

トゞメサセ 三善清行 善相公異見状ニ 伏見朝家五節之舞姫者大嘗會ノトキ五人皆預叙位其後年ゝ新嘗會ノ時四人無預叙位之例由是至大嘗會時権貴之家競進其女以充此数ニ 下略
此年ハ毎年ノ五節ナレド舞姫ヲトゞメテ叙位可有ト[illegible]ノ仰ゴト有更ニアル年ナレ各娘ヲミヤヅカヘニ奉ルベし

五節にはよしきよ今は近江守にて左中弁なる
なんたてまつりけるみなとゞめさせ給ひて宮仕へすべく
おほせごとことなる年なればむすめをおの〳〵たてまつり給ふ
殿の舞姫は惟光朝臣の津の守にて左京大夫かけ
たるがむすめかたちなどいとをかしげなるきこえあるを
めす からいことに思ひたれど大納言の
ほかばらのむすめをたてまつらるなるに朝臣のいつき
むすめ出したてたらんなにのはぢかあるべきとさいなめば
わびておなじくは宮仕へやがてせさせんと思ひ
おきてたりまひならはしなどはさとにていと
よくしたてゝかしづきなどしたしうみにそふべきは

其ノ日 十一月中ノ五日ニ源ノ示ヘ参ラセタリ
是ハ天子ニ入ノニイリノ夜ノ日ノ丁也
三日ハ辰ノ日也

此門ノ前ノ試ハ寅ノ日ニ帳台ノ試ト云ハ
主上自大師舞ノ師匠ノ為ヘ上御成舞姫ヲ御覧
スルニ付時ハ主上ハ直衣ニ指貫ヲ
差貫有之是ハ殿上人ニ立ニ可行ル
ニ成リ衣束ハ舞姫ノ
時ノ帝ノハトラノ日
ノ暁源ノハ丑ノ日夜也

いしうちはしめのへて三日のよつきて参らせ
たまふのよしはるさくわれはしもはりゐの
すぐれさるをと御覧しくらへられせらるゝ
ものどもをとくくよは巻てゐとおもたゞし巻
なかは法おほめしては読経きんうちなるし御佛
帯をまるらせてとゞさめ給まふ事法なてもあらず
とわくなるわうまへ乃やうだいかうちをおもし
わづらひそと一所れまう城あまよわきりけやなど
わらひたまふにつけても哀にかういまおわてすえる
ひろのかみ大かく乃君むすめのふたかわて見
わどもえいまゝまゐずるさうしかゝくそ文もよまで

なりがめかし給へ尽城心のやあくさむ也うたちらおて
まつ紀通あわ桑竹ふさまよりうちおめておりしげ
よえ志摩廉の乃りなまめいたまへまでハかの業女房
などは此とおりし也らえまるかた乃御かくふは
えだのまへふぶふ袖ちうらもそて也し給りしがわが
様ふ給なうひりのよおがすみのあわりんうとく
しけまいこなちなにとも心ざしを哀城衣ふはもの
まゐれふゐわうち給へ府なめわ紫衣ひありつおよ
おろしては三との袖は扇風などたてゝかわすめの
土佐らひなるよやすゝまわてれ多まゝたまへはなや
まゝけよそうひみしるわたりわ人丸佛経也

みえていはほうしろびやうゐやうだいなどのもと
さらびかすーきゑまさうわてきんこうはこくけまば
あまりよはえこ稚どかわきれいとよく思ひ出らゐ
さ殿にもろ殿うほるとはあけまどたぐみもゐうで
きぬのすそをひぬなるーしろ殿ふ相殿こ殿もなくあや
しと思ふよ

ほのあまはとよまうひゐの宮人もわのんぢを
きずあまむはうーきよけさうーうふとてうは奇
ゆるうふ殿ノ殿こどもちかうしまわてひとうはかーう

アメニストヨワカハ
天照太神ノ一ノトヨオカシ
ワカトヨミヤ（花ノ如ク五節
ニ殺シタキメルコヲワスル
ナトヽシメシノトハシメ須ク
スルんヽ　宿ヲミテ
ムラハカニハアラズ
天ニニス尼ヲカ蛇ノ神ノミテクラ　五月ハ竹ヲ取ル水アキトハ火ヲコラタト（ダリ
シトメコカ袖フル山ノミヲカキノクシキ五ヨリイハイノメテキ

メ青

ナラシナード　河ノカザリニヤアサギトハ六位ノ袍ノウワキニヤノメ青ノ糸ロ
セズシテウワキイメトヽ五ニ月ノ糸ニカコヲケテナラシ計ノ色ヲユルサ
テ糸ロシメノトヽ直衣ヽ　位ナクテ直衣ヽ　色ユル例アルニヤ宇治ノ左府ノ記ニ妙音院相国ハ五衣ヲユルサレズシ
テ糸ロナキトヽ

なまはいとにおうてきさるをぬあさぶの心やー
くれぬへ来わ殿るもをびゐうゐわ殿をゆ節は
なまふきびいふきてらなくるぬかるまるきてよおよれ
くそばまあわきなまふみのどくわはーめまわて
おかーたるちまなへてなるとせふめほーしきは
えなわ五殿の殿い殿ぎーきくいづまを
大殿のと大殿云殿やはすぐきうちを葉外のうち
ぐよいとおりーぐるまどこうをうとめでのきる
すいれ大殿ふはをふまかわくわ殿きよぐる

五長ノ糸ニ式
十月中ノ丑日ニ葉姫
糸入或ハ暁糸幻有
帳尾ニ寅ノ日童女覚
ノ巳卯日童女覚
辰日ニ會舞姫進
舞　花多

巳ニ帳ニ堂ノ式トニハ主上自大師ノ房ヘ
主上ノ有テル覧スルトヽ

大殿ヨリ出タルハ伝
惟光カ娘

毎年十二三し
今年十四五し

いはゐまで花の袖と見えまじう志みそたる様体
などのあはれ難うけなるをうちかめらるゝ
巳云人ノ目メテスル二シメルト、ハ
キコ（ヤクシ光カホニイタル私云モノニテハナキト し
仕立タルヤウダイ世ニ鏡云ホド、美し
なめれ例の余所よりはいかにおとなび
はづげなんとなるとしなれ家あわりて帰り給
まかり着ためとまわ給ひし城と見乃きがさを
前ノ巻ノ五節ノ
おかしいはば津の日乃普はざさはりつれ津ふとの
ツクシ（ヘ）まし
うち思ひやなべし。

ツクシノ五節ヘト…古キ世ノ友ト
神サビタラントし古キ世ノ友ト
ハ源氏ノ前ニアヒ給ヘリナリ
アニウ袖フルトハ九ノ字ニ
ヲトメコガ袖フル山ノミヅガキノ
久シキ世ヨリオモヒソメテキ
ト云ヲトレリ万代ニ
制通ザル不嫁女
又女ノ熱名氏
君ヒメニハスサナトエニ
ロシテ介年ノツモリ
カシニシナラヌ計ニテ
ニセニシトし
五節ハ面白ヘルモ
ハカナシトし

をとめ子も標さうひぬるし天津袖ふ成きよみ
とも数進ぬまいは年月のはもわかずへてうち
おかしくふまし乃髪を思ひおりぬるすの乃おもしう
おかゆみもそうなしや。

カケテイヘバトハ云カクレバヤ昔ノイシカケテ云バヤ日カゲハ蘿カヅラヲヨメリ日カゲノ糸ヲカザシニシテ舞し
袖ニトケシモハ昔源ニアヒタルヲシヨムし 赤紐トテ紗ヲタヽミテアフミムスビヲシテ肩ニテエヲ垂リ
右ノ肩ニ三筋トヅルし
日蔭ノ糸ハ白糸ヲアゲ
ニキニシテ左右ハ助或ハ
十二冠ノ左右ノ角ニトホ
ヒテタルト、い

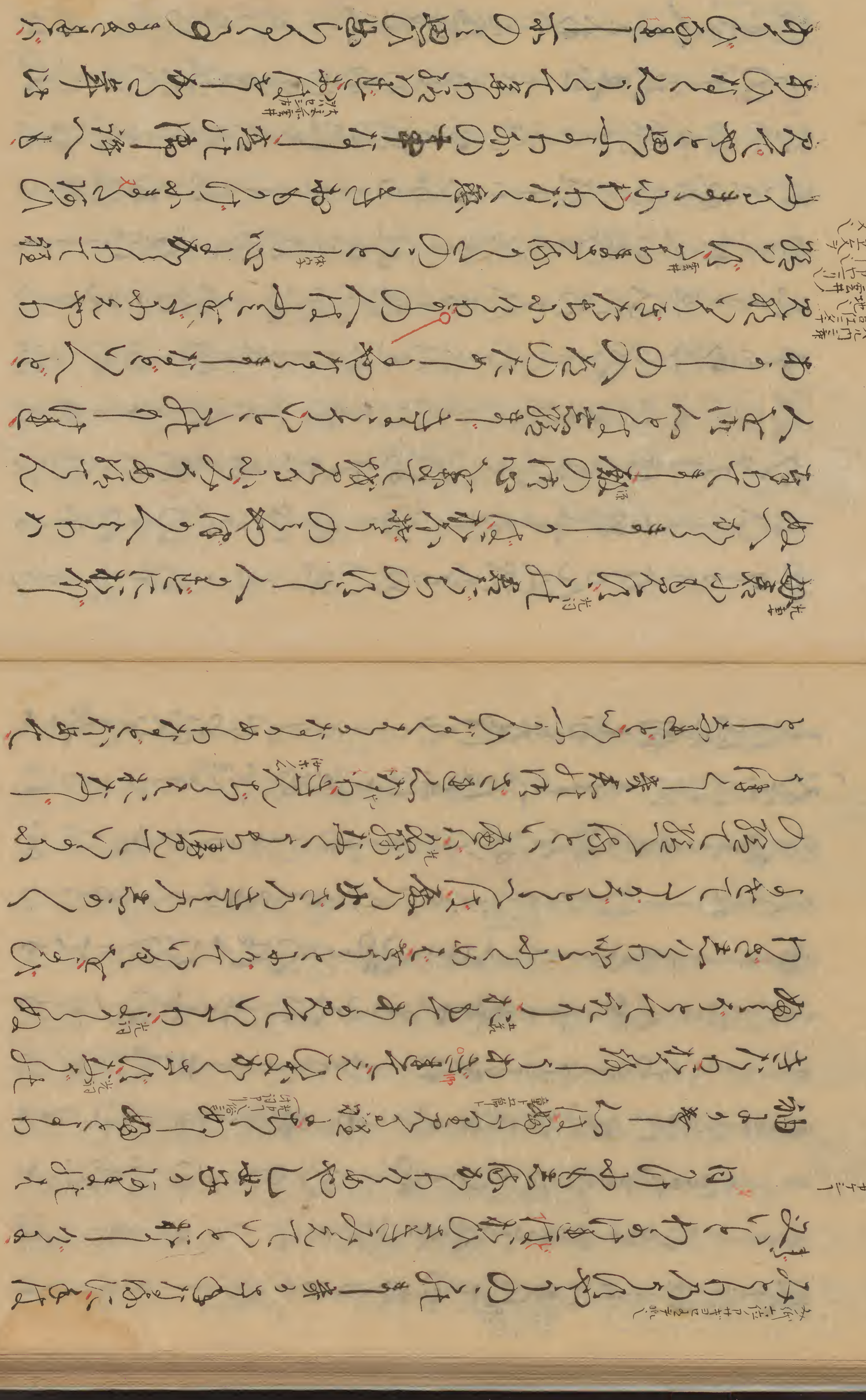
うけていふはるふのこゝろとぞおもかゆ進日
五節
アヲズリノ紙 錦紙
うけの宝乃袖ふとけきもおはけはのすんまくとわ
ノ装束丑ノ日ハ赤色ノ唐衣ハ寅ノ日ハ青色辰ノ日ハ青摺赤紐ヒカゲノカヅラし青摺ハ忌衣ノ如し
巳云小忌トハ白キ布ヲハリテ山藍ト云草ニテカタ木ヲ摺ルし大形カリギヌノ如シ
あへてまきうけうたるこはぞうすゞめてう
源ノミヒ也タル辰
ノ日ナレバ五ヲ
ヲ青ズリノ紙
其日ノ色ニヨリ取アイタルナレセニシヲノ手紙人ノ纏云ト卯カ文面白ト源ノ覚ユルし
ノワザノ君タキリし惟光カ娘ノ五節ニ人ニメトニルニツキテ人ニ云ズ思ヒトナリ
がちうりうちまぎみすゝまなるも人の纏よつきてハ
ねしと使給え。そ夾ぶの君も人のめとまはよ法器
ても人きまゝ進思ひあれ我妙へど、あふわちかくぶる
ケシウトハ東ガ
心又ケザヤカト云
モ同
よきばいとかくしうもそなし たまへば、あれはく
東ノガ殺ん ○師 ケザヤカノん
ましき殺のんまはあけりうそやんぬかふおちりし
ツラキ人トハ雲井
ノ雁ノイ、
もいかも心ありはきそばく我人死なくさあぬもわ家
わざしせむやと思ふ座りてられ心とめさ躰給ひて
定ぼうんりんべな法気をあわけきとはさびをぬうそ

アフミハ一　五節ノ前ニ内裏ニテ試ミスルヿハ
大臣ノ亥ニテ云ハ親ノ国ノ名可ヲ取テ放宮ハ
雄ノ拔ノ拔院ハ
幸崎ノ例ヲ以テ面白
筆ヿ帯し
アゼチ大納言ノ娘モ
取別テ宮文ニ可出
トし
左衛門督娘ニテナキ
ヲ出シタルトし
寛平ニ蔵人令領
公ノ中ノ今貢ニ人雖
非其子必令求貢
此ハ氏ニトカメハアリ
ワレ五節ニ参リ
シトし
ツカミハ　惟光ガ娘ハ
内侍ニ参ルヘキ
ナヲ仰出し
ト云し
惟光カ娘ヲ見ソメ
アラナドモ雲井ノ厂ヲ
思ヒハスルヽ所ナし

ちをてだつかはかくはかなきのりしへはれよみハなま
まといどこそまうでぬ大納言もさうらよ案らすべ義
よし按察使せさうを竹ふ左衛門督人なるぬ故ありて
とうめ有けれどそれもとくめさせ竹ふ津の守がこと
内侍のはたち侍たるゆとやさをせたまひさうもゆゐる
りうましと大殿もわかひたるをそれ人はきて給て
いとくちおしと思ふまう年の雑くるぬなどかく
尚げなうずはうひえそまし猶をわりふんわと
ごふまうまでやかなん事かうわざとの事よは
はらまでうちうんて深く波家しおわくあるう
とめりは殿上はつまみふのきこま案わはう

まほほを例のわもなきうしうくらひたまふて
翁はいかうちへは案内と宮給ふこともしらうは
吹侍まこ吹ゆかれいとよりわしうが近く給ふ
よう悪しけれまふつまりえ家ふくんもう
屋ましきをまうえをてんやと乃給へばいりでう
さは侍らん心よまあをそてもえみ侍らずなのこりう
りうとそてちうくもよきを侍しまえまして給ひでう
君達小は侍鏡せさきんときて遊翁うそ父とよま
とてたまへるさきくうやう見す見いふ鶏屋と
くるしけれどきめて給庵ばいとおしうてまそていぬ
年の雑よわいされてやあわかんおりしとみなわ

亥元面白手振トし
タキリ
源モ其ヲ見ニ驚トし
ツキリ
上元カ方光カ子
童羽
〔夕ヤト云ん ソノナト云ん〕
〔惟光カ孔ノ使ナト常ニ セイシタルトし〕
童ん
〔両説立テ童ノ五節ノ氏云リ 五節可然カ〕
[illegible]



けさんへうくわかえ給はくみこもわぬ給へをまを蔵ハ
この院此墓まうきこえおほきまわ給ひを添犬
宮の御世盛ずくあげなる故おはきびかわなんはも
かくおさなき縫まわれおらしせう給ふお侍きと
やまと竹へば花ぐの給まし此侍ふ給ふてなほりしう
若り思ひ侍りひまわ給ふ花此のふなど見まゐ
ゆもおぼちのまかなくびもおりしくゐのふかく給
人を人ハおもひ侍りて給はさるべくわなどもがはな
おちりほゞきひとの侍からちをもう侍ふやうけて
あひしと思ふもあぢきなしや心さへのまやうま
やりうかなん人故あうはひ思りぬとおりふまうさ

むかひてみるうひなううんもいとおしけ也かくて
よし御竹ひよ花まど敵乃やうなる侍うちちほんと
おほくのもぞてそゞ御ひゆのへずそさしかくうはる
ほくともておまきうりし給ふぬ侍もせずべきあわ
きわと思ふ心ぞそうしうわかる犬犬やのかさち
いとおしまきどもいときこゆるのおほしうし
かもうしこかも人ハかあちよ乾物ゆゑのめなほ
給へる故のこまわすぐれさるきわ侍うさちの庭
さうぞうるんちしそ庭をくよ侍ゞすくなき庭
あとかあくそうらハしきなわくわ峯乃昔ゆは
むかしの侍うぞくなど言ハたぐ此昔一晩の添

事ぞまことなるいうぎたまふあまくだり
いとさまことりたてまつりそなへ給へるをんぞも物うくのこ
おぼゆまいばいいとなとまはぬ　もうちへ来給
まうしおもひ給へふるふふめかくいうぎを給へんと
きこえ給へはあはれとてうさもなんかひをまを
さもん人のやうゆもの給へふうふとのまへばかひ
給ぐこ給ぬまたるんちぐまとやとひとわざちてお
ぼくこそのの給へまうしぬ事ぞ物ふなくむとい
んくこうて言もうちひうえ給ひぬかとこはくち
おしきいの人ぐまんをたかうこはうなき
ほまれ志めやうふうくふあ　給ひ物かかう

前ニ雲井ノ乳母ト六位スクセトヲシテシタ心ニモ合テシ

なりめぐちり思ひいまき給べ変ゆかりとの給ふ物
うハ六位なと人よりなほ給わ給めきばまいりけ
とは思ふ給ふまはうちへ来ふも物うくてなんあ
おとおしりまきうばふまきまとも人ふは
ほふづ北物ぐまきまり物あまそぬ歌りおは
はまとふくくうさまるちておぼいたまば
おりまはわるよたあはくも条ふまはぐまひん
ぐ乃院まそのこのんおまんへちうく給るだ乃は
ぐこう義ふ越一物へおやと一ふおはは一ゆき
まうばは事を思ひ給ひはるまをはるを流入おはるを
はぎこそ一物へ流くうまとて流入おはるを
はぎこそ一物へ流くうまいえうう安なほよきい

いかゞほろ〳〵と泣給ひて、とく入なく成し人は〔大実門〕
あだしくにいきてさらに何なりとものぼるも
すくせくちよ人の世をすてぬまでは本意にぞ思ふ人も
なほわざなるを思ひのまゝにぬき本意にて出家し給へこ
おとゞの七志けれど、なほ出家し給へり、いはんや〔附ヲ〕本意は
かはこほしことたのみ思ひまで思ふ〔なり〕か〔古大臣ト〕
あぬるのおかへのふかう因のおとゞの給へるも
なへての人のはちゞど世人もめでいふなまめかし
昔ものはるるのみまさりゆくほどなりさもうら
めしきりおもひさき〔ツ〕くまな人さへかくいはゞか
ましも世を思ひしめわたりまへまばいとなむあつ

源朝日ニ出仕十ノ長関ニ内臣トシ年代リ
源廿三ニシ大政ニ成後ヘハ節會ニモ出仕
ナキニヤ忠仁公ノ例
シ大内〔ニ〕ヨリ
出仕トシ

うらめしき世なりとぞ、なきおほきおとゞもよろしからぬ事にいたち
みも大饗は御あはせしもけふのとのにて
おはしましけるに、おとゞしろきさえの
よろしのなびらへて白ある〔ひ〕をば節会の日は
うちのきはうましてもぎのためにもこと
えていはゞしおはします有様なれば、おさ〳〵きこえ世の案内

ヨシフサノ大臣正月七日ノ節會ニ源ノ前ヘ
皇ヲ引川門ノ
ギシキシンウンシテイ
ツキカシヅクル
トシ門ヘ白馬ヲ引トキ左馬寮ノ頭以
下供奉スル儀式ヲシウツシタルニヤ昔ノタメ
シ良房ノ大臣ノ時
ヨリノ例ナルトシ
忠仁公良房依紫家准三后ノ宣旨日青馬ヲ覧スルニヤ
忠仁公ヘ青馬ヲ読スル事無不見了シ貞観十三四月
十日忠仁公為准三后ノ初ニヤトミヘ宇治殿青馬ヲ引ハ絶
后具シ三后ノ初ニヤトミヘ
ノ後ナレバ付物語ノ例ヲ用ニヤ

朱雀院ヨリ冷泉院
朱雀院ヘ行幸シ
天長十正月二日
仁明天皇幸淳和院見国史村上十トノ例ニヤ
朝覲ト云テ父御門ヘミヘ奉春ノ行幸也
古宮薄雲ノ三廻
忌月シ

朱雀院よりき幸あり。花ざかりはまさしき程なれど
弥生は十日ごろの御忌月なれば、ひらさきたる桜の〔キ〕
色もいとおなじ様にほぼ、院〔朱雀〕にもきよういことあり
はくろひみえて世給ひけり。幸よりはかうまほにおぼふ
上達部みこたちもわりしめ給ぼうひ給へるに人

青色ト麹塵ト云ヘシ今モ極臈ノキル袍也
青色ノ下カサネニハ桜又柳襲ヲ用ヘし
竹門赤色ノハゾトハ
上ノ衣ノ一二ヤ
花ニ云内宴ノ日又殿
上賭弓ノ時主上并
二ノ宮ノ公御赤色ト
西宮ノ記ニ見タリト
召アリテー 係ヤ
一ノ人ノ下ル赤色カ

ゆへにほをさにはくらかうへ撰き給ふ、うへのきぬなどおもの
色乃はうまゝあはしあわておなれたまふ
あをしあるいは紗へまはいよくひとつ物と
ありやきそみえまゝりきぬ人々のさうぞくうい
つまのこともに院も以下きまゝり殊びまさりを（卅六）
給ふて清さ屋ようひなまめきたる方なりいてまをを
ぬへつるりふくわざとの文人もめさびたてまつれたぶえ
文帝ノ生ノ試ハ式部省ニテ行ヘシ題ナシ凡
勅題ノ中今日ハ必朱雀院ノ前ニテ勅題可
成 延長 應和
東保ホノ例カ
まのんえ乃髭をあびらくて清髭給ふ大殿の太郎（ニメキリ）
るしきやまもうる学生十人撰めし式部の丞
オゾメカキ者トハ
腰病者不学者ヘし
君乃ん見給べきゆへなめわおくうつき物ぞいと物も
ワナカヌ舟 放島ト云
テ放ツ島ニシキテ
詩ヲ作セ試ヘ詩ナド人ニ
スベナゲハスノナキト云ベし学生スクナキんし 象士ニテハ文章ヘ入テ筆硯ヲ随身サセテ外ヨリジヤウヲシロシテ カギヲ取テ内ニテキニテ作文試ヘトミ、
和ずえずはなかぬ毎小のわて池よそふきとそいと

昼ヨリ後ヲ日ノ
クダルト云

すべてあげ日やうやうくだりて楽の船どもこぎまは
りて調子吹きあはせ猿の山風のひゞきおもしろく
吹あはせたるなり次ぶれ声いみじうくるしきみち
なまでもましらひわそひぬべき物なと世帯うる
めうおほえ給きわ書学語まふなどり昔乃むかし
えんの猿おりし出て院のみそなはしみさはうわれてう
朱雀ノイし
古院ト花ニ云ルハ誤し
見てんやとの給はするにはきそれの世の事共よ
古院ノ代ノ
花宴ノ
おもはれ給ひてまゝひてはける猿よおとく法に御
すからけ楽の給ふ
後セニ 鶯ノナクナル
声ハ昔ニテノ我カヒト
ツノアラズモアル哉
鶯のさへづる声はむかしにて むつれし人ぞ
むかし院のうへ

院ノ下ノ震ノ谷ノ仙洞ノ事

今上ヲ祝スル事故メカラカニヨミ給シ改道皆ニカハラズ目出度トシ

丸童城殿ゑさかるこしかの
うらひをはあり沖のうつ
もそこはは上ふはうはらを
いすゝへ城きはるさへ
るの吉さんりりぬあざ
ゑへはゝいいしにめで
の者をうひてさん
ゆやあをたるゆるの
ゆへくをくおりまは
うちくのすなばあま
りんゑうおとてるる

果下ハ元辛シ春宮嚬クモソセテシ

今上

朱

蛍

今上

学えん

学

ヤクソモヨム
北下ノ天人ノ義ヲスルヲシ

無樂中ニハ延アルハ天暦二三月九日朱雀院ヘノ行幸ノ例シ

おがはるゑ
びん西のおとぐ和
条てきんは例
ゆてゞ上ゆすぐれた
くゆ物へはゆいたとへむす
つまるさゝゆはなさうと
月おは例にさ出てお
あぐ口ゆ決はともして
文ゆまはばかゝはつ
かるゝ城ゆをとゝひき
なきけあけまばゆへさかわ

はうをきいはわゝゝゞまゆ
うちくのすなばあまゆもなゞを正や成ゆ
りんゑうおとてるるやわゝん糸ゆとをくて

見下ノ上ノ前ニハ元ノ引

ちゝゝ四のかゝゝる

ちうゞ上ゆ

ちうゞ上ゆ

ちうゞ上ゆ

とも引きさゝひ殆結ぶよ殆うひ殆てはたいめん
わわいと以てうさゞはけ殆ひよ殆ほけうひめも
冷泉 為尭をわりひむきさえ殆てめくなゞくおります
たゞひもおりまゝ殆ふ物をとくちおりうわも
西宮 かはいはもめくゝわめる殆よ殆のゝと志ゝき
ねにを殆をいとうゝゞくなくまゝまたゝゝ殆い
たゝよめんさゝゝ引者の御世のゝと思ひ出らき
西宮 結ゝゝうちなゝ殆殆ゝ殆へ殆ゝけゞもよをくれ
結てねを殆けゞめも思ふ殆へゝりまぬをゝふなん
ゝぐさめ結をめゝまゝくゝもとやゝ殆ふ殆とゞも
さ殆べきやうり者ゝうえてゝとさゝゝみさゝふひて

なゝやゝ殆ふのゝと殆ゝなゝてかへゝせ殆ふひゝき
西宮 ふも殆は殆むゝおうはきそゝゝ殆おりゝ出らん世殆
たゝち殆べきはすくをはをたまぬ殆りゝうゝ
いゝゝへをく引わゞす因殆のうんのきゝゝゝゝゝど
やうふ殆ゞ出るよ殆なゝる事殆ふう殆今もゝち殆
べゝ殆わ風のはくゝりゝもゝ殆めゝ殆ゝ殆たゝゞ殆
西宮 殆者をおゝやをよ殆ゝをゝせ殆ゝ殆ゝる時ゝゞ
殆たゝうわのゝ殆ゝゝさゝうゝゝわゝなゝれゝゝとゝり
寛平三年閏八月 まゝ殆ゝ殆ゝんふうゝりゝ殆時ゞ者なゝゝて殆ゝ殆
世のゝ殆城殆ゝるゝゝ殆をゝとゝゝうゝんゝ殆まゝりゝゞよ殆殆殘殘
おゝゞ殆ゝゝゝゝゝゝゝ殆老ゝゝて殆ゝ殆ゝ殆ゝるゝゝゝにゝゞな

及第ノ前モ已ニ清アルヲ進ストヲ云ヒ今実ノ進士ナリ

夕十三侍従
延喜二年源ノ光ノ例アリ

ものうらやましくもあるかな
思ひ侍るこゝろ妙ひろ成かくて大学の寮に
うつりうつりわかくて進士よりわかひぬ年ほど
ものうらやましくもあるかな
ほうの位人なむあわれなる
ものうらやましくもあるかな
ものうらやましくもあるかな
ものうらやましくもあるかな

[illegible]事ともあわれなるひまもていと
[illegible]やびうの業ことうハしてなんるもあはれをる世中
ひ〻後ゆもれる御いうぶなるとぶ都ねのわふも
きこしめしてとは世中のなわまのきたんなきど
世わわをびあやみくふなきけなくことにまて
りたなめ宮人をもたちういなくうまりき事
のもあ用のふりすくしふ〻思ひ通たまふまま事
あういあわをめ世いふもれりくもうくもれば
[illegible]をかくあまさうくぼひあ人〻れふ
中よりかわ義たる御思ひすぐまて世ふちあ
ふくめてふまま事よ思ひうぼうまあ人〻

女院ノ妹ハ[illegible]ナリ[illegible]ハ后ヲイドミ給ヒ前ノ巻ヨリ見タリ

すくをなど我都までいよかひこもどめいがくり
ぶせふ又うをこふれ世よはまはまでひぐういと
なもあい覚こぬ歌のひ志のさう人事もはるべ義
よ歌とふ歌うび歌を心ゆうび想しとのこれ
がたわ宮院のはまぐらひの程などふもおとぐの
はちうぬなきやうなるをいよくうのと思ひ
志見妙人はなるべ八月まぐ六条院ぼくわそて
わうわたまふひはぐさるひのまちて中宮北院
なまば原ぐておりまたべ辰巳ふは殿のおわまを
べまもちもうとうい初るんぐ院ふ住たまふ
基のはすいぬひのちいぬ石の南方とあぐ

まてさせおへるまもりあわらる池山ゆもびんふよ
ふなるをばらぼーう色てあのおもむきのをき
てどのためて拾くよはうくのはゑがひれん
りんをはくらを妙へいの雨ひ世ごいい山たかく去の
花よ水数ほくてうん泥のさまかり絡くすぐ
まそれまへちうき前栽を紅梅桜山吹ぼーー
などやうの去ハもてあうびをわざとまへて秋乃前
栽をばむうくかれうふまをさわ中宮乃御まち
をばもとの山よ紫の色こうるべ実うへ木ともを
うへいばみれもとをくまきまーー屋われ乃吉ぬさ
べき君をそくうへ濡れとて源の雅をはるうふ

中宮住坊ニ昌子ノ
アリシ山

ほくわたくそれうれよあひて盛よさきみさまうわ
さがれ大井乃わるまの野山むとくり色をされ
たる秋也ふの元んげはすーーけなる秋わわて
友の陰りよまわはまへちうふ前栽くれ行まる風
まーーしうほべくまだうきまま乃やうなる木とも
木ぶうくかり絡く山里めきそ印孫迫ものこと
さうよ志わさして若ゆがゆる花たち色なでまこ
さうびくぐりなどやうれむのくさくをうを色て
番場乃木草花の中ようちまをさわ森たもては
ふて(馬場殿五月ノ頃ニ咲ニ)ゆのあとくぼくわ屋ちゆひてふ月れ帝
あうび所よそふのかとわよ菖蒲うんさげらをて

サガ大井ハ秋面白キ所也ト云ヒ合ヒハ
無益ニテヲカレタルト

昔ヲ思ヒ出テ花ニ寄
ヒカ花ナルヲ
ルヲ

苦形 一説ニボタン
又一種ノ草ニ云リ
岩茸ニ云リトシ

むひとみまやして世よ高ものどもをとこのん
よそさをゑまへるこ（ハ云上）乃まちはかおもてつよふて
ひくまちなわ（ハ云エノ本ト花町）ゑて（ハ云ノ本ト花町）乃うきよ私の本ちげく雪を
もてあうじむたよわりしをうわ冬のそ〜めの
雪はむすぶべ義蔵のまがきわまいかなるはすう
つ（カ）おきくなもそ〜ぬあたゐ本れの本涼きゐどを
うぼ〜〜うへさわ元げんのしなかひわうわ路一な
ゆさざめうせ路〜うどさはず〜ふやうなわ
とて中をいはし〜のべうを路例のおひらうよ気を
はまぬ花散里をそ夜うひそうつろひ路ゑ乃はを涼
らひい世はよあは路どいとんちとなわ路車十五
（紫上ノ代）

（母ソハラ脱石ノ脱ノ母ニトゑん）

彼山斤ハ乗生得未
原ノ十五ノ十日ニシテ
原ノ紫ノ上六条院
へ原移し

活希四位ゑ位げ花ゑそ六位ゑ上人などはさふべま
弘をえ〜を竹へまちふ（コトく）ゑ竹へまちげ世のそ
ゑりやとそふき竹へまばはる（ヤリミルん有ノ字）もなど後くさう
りめ〜をすいあり（花ナル）今〜方ゑ花ゑ方ゑ気ゑ〜おさ〜れ
ゑ（ヌ）ゑ花ゑ（メキリ花ナル）ゑ花ゑ方ゑ
ゑへばぐるめうをほるべゑ（花ナルニ涼子後後ニモ市）よ事也ゑわ世みえたわ
女房の曹司まちゑ世あそ〜くのこまをう大方ゑる
まわもめでたうわ〜ゑ方ゑ六日ゑて中宮（ハ云ヲ）ゑ
ゑ世ゑ活ゑ（ケ）ゑ〜きりゑさうはいゑ色ど（ト）ゑを〜ゑさいゑいの
ゑうぐゑ世ゑへゑ〜ゑ風ゑをびゑ風ゑ絵ゑそゑ世ゑの方ゑ後
よく〜ゑおもゑうふゑすゑ〜ゑをば世よゑおゑく思ゑを

（サハ云ヘト両セワし
原ノ世ヲハガリコトく
ゑいニタニストゑニア
メリテ
又紫ヰラモテナニ
ゑトイヘド）

[illegible]ふしとすぐまてあんあり[illegible]まちの中ゆへゝゝ[illegible]ゆきあり[illegible]
[illegible]九月ふるあれば[illegible]
[illegible]の花[illegible]
[illegible]
[illegible]

タツタ姫秋ヲ司ル神
何モシカタキコトニ
交ノ内今ノ中宮ヲスク
クヒメニヒシテニカ

なめり。春の花ゞのもとかはいと面白くあたらしう
紫式部いひくらさんいとゝ侍たる姫の思りん事もあ
さましきまで花の陰り立かくまてあうはよる義
うい出こゝあとやまと姫もいかゝ原文目録ヲ
侍有様の見不知用うるよりいとゝ思ふやう姫君
しれやもうより弱大ぬの方はあうこゝくの
はうはの方ひさぶまりてうびなくぬ人はいはとなく
はぎこいさんとおがて秋世月かなむ渡殿くる侍
主殿らひうとの有様をとゝびしてわすれ給はず
春の御たあをおがをば大うこの方ほうをゝ姫の
こうなるこゝをいとゝ過こまくもてなさせ給へ